

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K10636

研究課題名(和文)慢性の病いにおける「言いづらさ」を包摂する看護理論の事例研究法に基づく実証的研究

研究課題名(英文)An empirical study based on the case study method of nursing theory that encompasses "difficulty of telling" in chronic illness

研究代表者

黒江 ゆり子 (KUROE, Yuriko)

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授

研究者番号：40295712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」に関する実践領域モデルを基盤とし、関節リウマチにおけるケアを提供している看護職者の認識、語りを聴く姿勢、の実際、語りを聴く時と場の実際、語りの内容を踏まえた看護ケア、実践した看護ケアから生じた事象等を明確化し、そこから「言いづらさ」をふまえた看護の特性と意義を洞察するとともに、慢性の病いにおける実践事例分析のあり方を検討した。リウマチケア看護師及び慢性の病いに基盤をおく研究者による専門家会議を開催し、リウマチケア看護師の実践に関する語りの内容を丁寧に読み取り、クライアント領域、クライアント・ナース領域、及び実践領域に分類し、分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慢性の病いに関する研究者と実践家による専門家会議におけるグループインタビューの分析から、クライアント領域では、自分の病気と折り合いをつけることの大変さ、自分のことを話すことができない等、クライアント・ナース領域ではクライアントの語りをそのまま聴く、クライアントの語りからその人の人生を紐解く等、実践領域では初対面での対応、治療への意思決定への支援等が示された。

実践家はRAと共にある人々の「言いづらさ」を認識し、初対面のかかわりから工夫し、自ら名前を伝え「よく来てくださいました」と語れる環境を創出し、個人的な内容が語られた後は感謝を示すこと等が示唆され、看護実践における重要点が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Based on a practice domain model on the difficulty of telling to others in chronic illness, we clarified the awareness of nurses who provide care for people living with rheumatoid arthritis, the attitude of listening to narratives, the situation when listening to narratives, the nursing care based on the content of the narrative, and the phenomenon that occurred from the nursing care that was practiced. We will gain insight the characteristics and significance of nursing based on the "difficulty to telling", and we examined the ideal method of practical case analysis and case study research. We hold eight expert conferences by rheumatology nurses and researchers based on chronic illness, and carefully read the contents of narratives about their practice, classified focus on the client area, client-nurse area, and practice area, and analyzed.

研究分野：慢性看護

キーワード：慢性の病い クロニックイリネス chronic illness 言いづらさ クライアント領域 クライアント・ナース領域 実践領域 関節リウマチ

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、萌芽研究(黒江:業績2)において、慢性の病いにおける「言いづらさ」の探究には、病いとともにある生活を営む主体としての「生活者」を捉えることが重要であること、及びライフストーリーインタビュー法が重要な役割を果たすことを示し、この知見を踏まえ、平成20-23年度における基盤研究(c)(黒江:業績4)において、慢性の病いとともにある人々のライフストーリーの分析から「言いづらさ」が確かに存在すること(黒江2011:業績25)及び慢性の病いにおける「言いづらさ」とは「本人の認識にかかわらず、『言わない』『言えない』『言いたくない』といった『言う』ことに抵抗や苦痛が生じている体験」として説明した(寶田2011:業績23)。さらに、看護師のストーリーから看護職は人々の「言いづらさ」をとらえ、社会的立場、家族背景、及び「生きることの意味」をふまえてケアを提供していることを指摘し、慢性の病いとともに生きる人々の言いづらさと看護職の「聴きづらさ」が同時に存在していることを報告した(黒江他:第5回日本慢性看護学会学術集会交流会,2011)(黒江2012:業績22)。平成24-27年度の基盤研究(c)(黒江:業績5)においては、HS.キムらの理論構築の考えに基づき、慢性の病いにおける「言いづらさ」を基盤とした理論構築の構成要素として「クライアント領域」「ナース-クライアント領域」「実践領域」を論述するために、「言いづらさ」の事象の先行要件(antecedents)と帰結(consequence)を分析し、『他者に伝える言葉が見つからない』『他者への気遣い』『傷ついた体験』『社会的偏見との遭遇』等が「言いづらさ」に繋がっていること、及び「言いづらさ」の事象における登場人物は、家族(母親,父親,兄弟姉妹等)、職場の人々、地域の人々、医療職者(医師,看護師等)であることを指摘した(黒江2012c:業績20)(黒江2015:業績18)。これらの「クライアント領域」「ナース-クライアント領域」の論述を踏まえ、「実践領域」モデル案を作成した。

平成28年度からは基盤研究(c)「慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」を基盤とした看護理論の創成とその活用」(研究課題番号16K11920)(研究代表者:黒江)において、看護実践者(慢性疾患専門看護師、医療機関看護部門管理者を含む)及び大学教員による実践者会議を開催し、先行研究において考案した「実践領域」モデル案の臨地での活用可能性と方法を検討するとともに、「言いづらさ」を踏まえたケアに関する「エピソード」を集積し、実践領域モデル案の精選を図ることで、諸フェーズに沿って看護職の認識を深化させながら実践活動を行う必要があることが見出された。また、日本の文化における「言いづらさ」の特性について、慢性の病い(糖尿病:1型・2型、神経難病、炎症性腸疾患、HIV感染症、精神障害)とともにある人々の体験記と日本の近代小説を繙き、日本の文化に存在する多様な「言いづらさ」を示すとともに、「言いづらさ」の先行体験は、『他者への気遣い』『傷ついた体験』『仕事への影響の懸念』『状況の理解が難しい』『伝える言葉が見つからない』『社会的偏見との遭遇』として明示できることを報告した(黒江2018:業績13)(黒江2019b:業績11)。この見解は海外学会発表(Transcultural Nursing Society Conference,2019,Richmond,US)において、日本にのみ事象ではなく、多くの国々においても同様であるとの意見交流に繋がった。さらに、実践領域モデルは、クライアント領域とナース-クライアント領域を含め下記のように精選した(下記資料参照)。本研究では、当該実践領域モデルを、慢性の病いの視点をもって新たに看護を構築しようとしている膠原病(リウマチ性疾患等)とともにある人々への看護を含めて活用し(黒江2019a,2019c:業績12,10)、事例研究法に基づき描くことで看護実践を可視化することができ、当該理論の意義を明らかにするとともに慢性の病いにおける事例研究法のあり方を提言できると考える。

資料:慢性の病いにおける「言いづらさ」における実践領域モデル

フェーズa:慢性の病いの特性について知り、これまで培ってきた自らの認識を確認する。

病いの慢性性/クロニシティ(chronicity)について、病気に伴う個人・家族の長い個人史や生活者としての特性等を知ると

ともに、病いの慢性性に関する自らの認識に気づく。

**フェーズb:慢性の病いにおける「言いづらさ」と「聴きづらさ」に気づき、‘語りを聴く’姿勢を整える。**

・慢性の病いにおける「言いづらさ」の先行体験と帰結及び言いづらさが解ける様相について知る。

・慢性の病いとともに生活している人々の他者への「言いづらさ」と、ケアを提供している看護職者の「聴きづらさ」を認識し、人の語りを聴く姿勢を整える。自己の‘語りを聴く’姿勢に気づき、あり方を考える。

**フェーズc:慢性の病いとともに生活する人々の‘語りを聴く’時と場を日々のケアに取り入れる。**

・個人・家族が語りたいことを語れるように時と場を整え、語りに耳を傾ける。また、それぞれに語られた内容に目を向け、どのような個人史及び生活・生活史が包摂されているかを考える。

・個人・家族に「言いづらさ」が感じられる時は、直接的なケア等を通して「大切にされている」という思いを抱くことができるように配慮する。また、個人・家族が「理解の難しい病気」と捉えているときは、それらの思いを含めて語れるように支える。

**フェーズd:慢性の病いにおける「言いづらさ」を踏まえて、自らの健康生活を考えることができるように支援する。**

・信頼して語ることでできる環境が整えられると、人は多くの語り、将来について考え始めることから、個人・家族が自らの思いに気づき、思いに沿って慢性の病いのある生活を創ることができるように支える。

・個人・家族が「言いづらさ」を抱いている場合は、他者に言わないことの罪悪感を解き放ち、言う人と言わない人を自ら決めることの大切さを伝えながら、自らの健康生活を考えることができるように支える。

**フェーズe:看護実践における上記の取り組みについて看護職相互に意見交流し、振り返りを行う。**

## 2. 研究の目的

慢性の病いにおける「言いづらさ」を包摂した看護理論を慢性の病い(膠原病:リウマチ性疾患等を含む)とともにある人々への看護に活用し、当該看護理論に基づき創生された看護実践について事例研究法(case study research)を用いて描き、可視化し、病いの慢性性と「言いづらさ」についての看護職の認識、‘語りを聴く姿勢’の実際、‘語りを聴く時と場’の実際、‘語り’の内容を踏まえて創生した看護ケア、実践した看護ケアによって生じた事象等を明らかにし、「言いづらさ」を包摂した看護理論によって創生される看護の特性と意義を明らかにするとともに、慢性の病いにおける事例研究法のあり方を提言する。

## 3. 研究の方法

1) 専門家会議を定期的開催し、「言いづらさ」を包摂した看護理論の目的・構成及び実践領域モデルの内容について共有し、諸フェーズに沿った実践のための基盤を整える。

2) 事例研究法(case study research)について先駆的に取り組んでいる MD.Chesnay 博士(Kennesaw State University 教授,米国)と意見交流の機会をもち、看護実践事例の事例研究法のあり方に関する知見を深める(8-9月予定)

専門家会議では、慢性の病いとともにある人々(膠原病:リウマチ性疾患等を含む)にケアを提供している看護実践者(慢性疾患専門看護師、医療機関看護部門管理者等を含む)及び大学教員による専門家会議を定期的開催し(年4回程度)慢性の病いにおける「言いづらさ」を包摂した看護理論の特性等を共有する。第1回会議は、当該看護理論の目的・構成について共有した上で、慢性の病いに関する自己の体験と認識についてディスカッションを行う(説明は研究代表者、及びファシリテーションは研究分担者が主に担当、以下同様)第2回会議は、実践領域モデルのフェーズaフェーズbについて共有した上で、‘慢性性’及び‘言いづらさ’に関する自己の経験についてディスカッションを行う。第3回会議は、フェーズc・フェーズdについて共有した上で、「言いづらさ」を踏まえて‘語りを聴く’ことに関する自己の姿勢を振り返る。第4回会議は、フェーズe及び事例研究法について共有するとともに、これまでの内容に関する自己の気づきに関するグループインタビューを行う。グループインタビューの内容は研究代表者と分担者が協働で分析する(以下,同様)

#### 4. 研究成果

慢性の病いに関する研究者と実践家による専門家会議を定期的開催し、会議におけるグループインタビューの分析から、クライアント領域では、自分の病気と折り合いをつけることの大変さ、自分のことを話すことができない、病気に伴う症状に対応することの辛さ等、クライアント・ナース領域では、クライアントの語りをそのまま聴く、クライアントの語りからその人の人生を紐解く等、クライアントの言葉の背景にある思いを思索する等が示された。また、実践領域では、初対面での対応の工夫、治療への意思決定への支援、家族等のサポートがない場合の支援等が示された。

実践家は RA (関節リウマチ) と共にある人々の ” 言いづらさ ” を認識し、初対面のかかわりから工夫し、自ら名前を伝え「よく来てくれました」と語れる環境を創生する実践を行っており、また、個人的な内容が語られた後は、「貴重な内容をお話しいただきありがとうございました」と感謝を示すこと等が示唆された。これらは慢性の病いをもつ人々の「言いづらさ」をふまえた看護実践における重要点として示唆された。

さらに、事例研究法については継続的に検討を行い、慢性の病いにおける質的記述的事例研究法の考え方として、「看護実践という文脈の中で生起している具体的事象に内包されている特定の事象に焦点をあて、そこでは何か起こっているのか、その要因は何か、どのような状態になっているかなどについて詳細に記述し、そこから看護の在り方についての洞察を深め、その成果を提示することで焦点化された事象についての新しい知見を示すものである。それにより、看護事象に関する人々の理解の深化、新たな意味の発見、自らの体験の拡大を促進するものである。」との考え方を基盤に、実践事例分析の方法の検討を行い、実践事例分析においては、事例研究の「はじまり」をクライアントが「なぜ、こんなふうに感じてしまうのか」という看護職の自問が重要となり(第一のポイント)、「終わり」に関しては、慢性の病いとともにある人が自分なりの解決に至った時点の状況を見極め、どのような事象が生じているかを明確にすることが重要となる(第二のポイント)。さらに、「はじまり」と「終わり」の期間をいくつかの場面に区分し(第三のポイント)、各場面のクライアントの思いと状況、看護職の思いと提供したケア、そこから生まれた事象の変化を明確化することが必要となる(第四のポイント)。それらの分析が終了した時点で、分析から得られた重要な要素をストーリーとして組み立てる(第五のポイント)が可能となるとの示唆を得た。

科学研究費補助金による研究活動(研究代表者)

- 1.平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金「基盤研究(C)(2)」研究代表者「女性の 1 型糖尿病における食行動異常に関する研究」研究課題番号 11672400
- 2.平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金「萌芽研究」研究代表者「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』についての研究」研究課題番号 17659674
- 3.平成 17 年度～平成 18 年度科学研究費補助金「基盤研究(B)」研究分担者「糖尿病自己管理アウトカム指標を用いた糖尿病教育ガイドラインの策定」研究課題番号 17390578
- 4.平成 20 年度～平成 23 年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」研究代表者「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』と看護のあり方についての研究」研究課題番号 20592503
- 5.平成 24 年度～平成 27 年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」研究代表者「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』と看護のあり方を基盤とした看護理論の構築」研究課題番号 24593223
- 6.平成 26 年度～平成 28 年度科学研究費補助金「基盤研究(B)」研究分担者「慢性看護実践における事例研究法の構築」研究課題番号 26293462
- 7.平成 28 年度～令和元年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」研究代表者「慢性の病いにおける他者への『言いづらさ』を基盤とした看護理論の創成とその活用」研究課題番号 16K11920

関連する主なる研究業績(研究代表者及び研究分担者)

〔書籍〕

8.IM.Lubkin, PD.Larsen 著：黒江ゆり子監訳,市橋恵子,竇田穂,藤澤まこと他訳：クロニクイルネス - 人と病いの新たなかかわり - ,医学書院,2007.

9.P.Woog 編,黒江ゆり子,市橋恵子, 竇田穂訳：慢性疾患の病みの軌跡、医学書院、1995.

〔論文：2019-2016 年度〕

10.黒江ゆり子：リウマチ性疾患の看護：社会面への援助 - クロニクイルネスにおける‘生活者’をとらえる、臨床リウマチ（日本臨床リウマチ学会雑誌）,31(3),239-245,2019c.

11.クロニクイルネスにおける他者への「言いづらさ」 - 日本文学における近代小説に著わされた事象をふまえた論考 - , 岐阜県立看護大学紀要、19（1）,147-154,2019b.

12.黒江ゆり子：第3章 生活者としての患者に寄り添う看護 慢性疾患患者への看護の理論、生活者としての患者と家族への支援、in 房間美恵・竹内勤監,中原英子・金子祐子編：関節リウマチ看護ガイドブック,211-221,羊土社,2019a.

13.黒江ゆり子、藤澤まこと：クロニクイルネスにおける他者への「言いづらさ」 - 病いにおける体験記をふまえた論考,岐阜県立看護大学紀要,18（1）,135-142,2018.

14.黒江ゆり子：看護学における事例研究法の進化 - 質的事例研究法の考え方と特性 - 、看護研究,51（3）,188-194,2018. In 黒江ゆり子企画：特集 看護学における事例研究法の進化 - 質的記述的事例研究法の可能性 - ,看護研究,51(3),2017c.

15.黒江ゆり子,藤澤まこと：看護学における質的事例研究法の特性に関する論考 - クロニクイルネスとしての糖尿病に関する質的事例研究に焦点をあてて - ,岐阜県立看護大学紀要、17（1）,147-152,2017b.

16.黒江ゆり子：看護実践研究の意義と方法,看護研究,50（6）,520-526,2017. In 黒江ゆり子企画：特集 看護を変革する看護実践研究の可能性 - 英国の Work-based learning/Work based research を含めて,看護研究,50（6）,2017a.

17.黒江ゆり子、藤澤まこと：慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法の意義と方法についての論考、岐阜県立看護大学紀要,16（1）,106-111,2016.

18.黒江ゆり子、藤澤まこと：慢性の病いにおける言いづらさの概念についての論考 - ライフストーリーインタビューから導かれた先行要件と帰結、岐阜県立看護大学紀要、15（1）,115-121,2015.

〔論文：2014 年度以前〕

19.黒江企画：特集 看護学における事例研究法 - 新たな研究デザインへの可能性 - ,看護研究,46(2),2013.

20.黒江ゆり子、藤澤まこと：慢性の病いと他者への「言いづらさ」 - 糖尿病におけるライフストーリーインタビューが描き出すこと,岐阜県立看護大学紀要,12（1）,41-48,2012c.

21.黒江ゆり子：「病いととも生きる」を援助することについての論考 - クロニクイルネスの視点から - ,日本腎不全学会誌,14（1）,11-18,2012b.

22.黒江ゆり子：慢性の病いと他者への「言いづらさ」 - 糖尿病におけるライフストーリーインタビューが描き出すもの - 、岐阜県立看護大学紀要、12（1）,41-48,2012a.

23.竇田穂,黒江ゆり子,市橋恵子他：「言いづらさ」は何を意味するのか,看護研究,44(3),305-315,2011.

24.竇田穂,古城門靖子：精神障害に対するセルフスティグマから解放された C さんのライフストーリー、看護研究,44(3),268-273,2011.

25.黒江ゆり子：慢性の病いにおけるライフストーリーインタビューから創生されるもの,看護研究、44(3),237-246,2011.

26.黒江企画：焦点 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」,看護研究,44(3),2011.

27.黒江ゆり子：病いのクロニシティ（慢性性）と生きることについての看護学的省察,日本慢性看護学会誌,1(1),3-9,2007.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 黒江ゆり子、藤澤まこと	4. 巻 21 (1)
2. 論文標題 関節リウマチとともにある人々の心理社会的側面に関する看護学研究についての論考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 211-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 34 (1)
2. 論文標題 関節リウマチとともに生きる人々のレジリエンスを支えるために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 臨床リウマチ	6. 最初と最後の頁 4-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14961/cra.34.4	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 42 (12)
2. 論文標題 セルフスティグマ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 メディカルビューポイント	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 26 (1)
2. 論文標題 糖尿病におけるスティグマとアドボケートとしての支援 - 他者への「言いづらさ」をふまえて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 糖尿病教育看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 黒江ゆり子、藤澤まこと	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 関節リウマチとともにある人々の心理社会的側面に関する看護学研究についての論考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 211-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 38(2)
2. 論文標題 看護学においてスティグマはどう考えられてきたか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 糖尿病プラクティス	6. 最初と最後の頁 175-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 273(2)
2. 論文標題 保健医療におけるスティグマ - 人々の内面の動きとアドボケイトとしてのあり方 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 145-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田万智子、藤澤まこと、黒江ゆり子	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 看護学の事例研究法における分析方法に関する論考	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 121-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 看護実践の質を高める「省察的事例研究法」のあり方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 看護診断	6. 最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 黒江ゆり子、中原英子（座長）
2. 発表標題 看護シンポジウム リウマチ診療における看護師の役割
3. 学会等名 第36回日本臨床リウマチ学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 RAとともに生きる人々のレジリエンスの向上をめざした看護
3. 学会等名 第36回日本臨床リウマチ学会 教育講演（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 スティグマにおける慢性病者の思いとケア
3. 学会等名 第15回日本慢性看護学会学術集会 教育講演（招待講演）
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 スティグマとアドボカシーをふまえた支援について
3. 学会等名 第25回日本糖尿病教育・看護学会学術集会 教育講演（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 日本型看護診断のこれからと事例を研究する意義
3. 学会等名 第27回看護診断学会学術大会 教育講演（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 関節リウマチという慢性の病いと生きる人々への医療者の関わり 'Living with Illness'の視点から
3. 学会等名 第27回大阪リウマチケア研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒江ゆり子
2. 発表標題 慢性の病いにおける「言いづらさ」とライフストーリーと。
3. 学会等名 第14回日本慢性看護学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 黒江ゆり子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みらい	5. 総ページ数 266
3. 書名 クロニックイルネスにおける「言いづらさ」と実践領域モデル	

1. 著者名 奥村美奈子、布施恵子、藤澤まこと、服部律子、橋本麻由里、黒江ゆり子、茂本咲子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岐阜県立看護大学	5. 総ページ数 60
3. 書名 令和2年度看護実践研究指導事業報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竇田 穂  (minoritakatada)  (00321133)	武庫川女子大学・看護学部・教授   (34517)	
研究分担者	藤澤 まこと  (makotofujisawa)  (70336634)	岐阜県立看護大学・看護学部・教授   (23702)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------